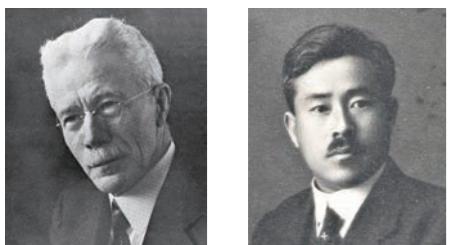




因島来島時のスウィングル博士と調査団一行



ウォルター・T・スウィングル博士 柑橘類分類学の世界的権威 の植物学者

田中長三郎博士



南方熊楠博士
日本屈指の博物学者・生物
学者・民俗学者

世界的・日本的に有名な柑橘の権威である両博士が、因島來島時に八朔の優位性を認めたことは、歴史的価値と大きな意味のある史実として、より大切にするべき柑橘として認識が深まります。

日本の柑橘の輸出を再開させることができた、田熊の六〇種余りの晚柑類が育つた具体的な場所は、もうその地を明確にする事はできませんが、大切な史実として、島をもう一度歩いてみたいと

中長三郎博士は再三にわたり因島田熊入りをし、島の柑橘農家との交流を続けつつ、一〇年以上の月日を費やし、柑橘類の調査を継続しています。その調査レポートは、スティングル博士と南方熊楠博士の手元にも届けられたと記録が伝えています。

島で既に、海外から持ち帰った柑橘類の栽培を奨励した古文書の事を周知していたと考えると、植物および柑橘が他の影響を受けずに固有種に進化していく環境に有つた事を認識し、最後の調査地としての選択に至つたのではとの推測もある意味許されるのではないかと思うのです。継続してこの点は調べていくべき案件と強く意識しています。

調査団一行が帰つた後にも、田中長三郎博士は再三にわたり因島田熊入りをし、島の柑橘農家との交流を続けつつ、一〇年以上の月日を費やし、柑橘類の調査を継続しています。その調査レポートは、スウェイングル博士と南方熊楠

【八朔巡礼物語り】

A photograph showing a large, segmented pomelo fruit on the left, a small whole orange in the center, and a half-sliced orange on the right, all set against a white background.

尾道市文化財保護委員
尾道ユネスコ協会事務局長

写真家 村上宏治

江戸時代には種子のある紀州蜜柑は、子孫繁栄を意味する縁起物として好まれ、種のない無核の温州蜜柑は「核無し」の「不吉な蜜柑」と忌み嫌われていました。明治に入るとその縁起の善しきれいは重要視されなくなり、主要として「聖なる贈り物」として

時は一八八〇(明治十三)年、日本産柑橘の海外輸出はこの年から開始されます。長崎の商人はウラジオストク、静岡県と和歌山県の商人はサンフランシスコに渡り、輸出と現地販売を行いました。当時、明治政府からの保護はなく、柑橘产地の商人が単独で販路を拡大した、と記録に残ります。

日本産蜜柑はアジア(朝鮮・満州)や北米(カナダ・アメリカ)に大量に輸出されました。商人達が選んだそれらの地は、日本人が大量に移民をした土地だったのです。特にカナダでは冬季に新鮮な果物が手に入らず、日本産蜜柑は高価でありながらも、クリ

▶当時の出荷準備中の様子（一部）。木箱に英字で「バンクーバー」の文字が読み取れる



明治時代、日本の柑橘禁輸が解除されるきっかけとなったのは、この地に60種余りの固有の晩柑類が自生していた、広島県尾道市因島は田熊でした。
(写真手前は田熊の遠畠風景)